

ネイチャー高知

No 30 2008年1月20日発行

謹賀新年

2008年もよろしくお願ひいたします。

新春恒例の「春の七草観察会」を開催しました。



1月7日を前に春の七草観察会を6日午前9時30分から、高知市久礼野で開催しました。

朝の冷え込みのために、早朝は一面に霜が降り、真冬の景色でしたが、日が昇るとともに暖かくなり、汗ばむほどの陽気の中で七草を採集しました。

スタート地点近くの県道わきの水田では、ほとけのざ(コオニタビラコ)、なすな(ナズナ)がよく採れ、途中の竹林の外縁では、せりとはこべら(ハコベ)がたくさんありました。その後、久礼野集落に移動し、シモバシラの茎にできた霜柱を観察した後、乾いた水田でごぎょう(ははこぐさ)を採集し、すすな、すすしろを除く5種類の野草がそろいました。

今回は、講師の細川さんに七草粥も準備していただき、事前に連絡のない参加者もあり、終りのほうではお粥が不足することになりましたが、ほぼ全員が美味しい七草粥を賞味して観察会を終了しました。



写真左 ほとけのざ(コオニタビラコ)



写真右 ごぎょう(ははこぐさ)

わたしのフィールドノート その9 海の味 山の味

田城 光子

エッセイスト山辺桐郎さんは、長いサラリーマン生活を終え大方に引っ越してきて四年間を、太平洋を眺め、四万十川に遊び、一冊の随筆集「土佐の海辺の町に暮らす」を新風舎から出版した。今は生れ故郷の信州に戻り、少年のような屈託の無い生活を楽しんでいるようだ。大方在住中は、植物調査中村チームで活躍してくれた。山辺さんはばあさんと呼んでいたが、決してばあさんなんかではない、素敵な奥様の園子ちゃん（わたしたちはそう呼んで今も彼女を慕っている）といつも一緒だった。著書の中で、中村チームは「牧野さんの子孫たち」として紹介されている。そしてなによりもこのエッセイからは、山辺さんの食通ぶりがうかがえる。世界のあちこちをふたりで旅して、その土地の美味しいもん事情にも詳しい。その山辺さんは、中村チームが毎年開く「草を食べる会」を、とても楽しみにしてくれた。

なにしろ調査でどこに美味しい草が生えているかが分っている。その草の食べ頃を狙って、摘み草に行くのである。冷たい春の雨が降る中を、根堀をぶら下げた一団が、四万十川の川原や休耕中の棚田の畦で一心不乱に草の根を掘り、「ノビルはエシャロットのかわりに使おう。ヤナギタデはサラダにちらそう」などと、食材をいかす工夫を口角泡を飛ばしながら論じ合っている。知らない人が見たらびっくりするだろうが、当人たちは夢中になっているからそんなことは気にならない。まず一日目は、こうして食材集めに没頭する。二日目が本番である。調理人は山崎さんで、これにはだれも手出し、口出しができない。しかし、花を生けたりお品書きを書いたり、それぞれに役割があるので、みんな退屈はしない。「草を食べる会」には、山辺さん夫妻は、今年も真っ赤な愛車をとばして信州から駆けつけてくれた。そんな山辺さんを「これは美味しい！」とうならせたものがある。くさぎなの佃煮である。これはクマツヅラ科のクサギの若葉で作る。生の葉には触れただけでも強い臭みがあるが、茹でて水にさらせば臭いは気にならなくなり独特の風味となる。クサギは日当たりのよい林縁や道端にいくらでも生えていて、簡単に採取できる。若葉は摘んでもまたすぐ新しい芽を出すので、少々のことでは枯れることはない。シーズン中、何回でも佃煮が作れる。

去年は、大月町の海岸沿いですこし厚めの葉をつけたクサギを採った。ところが佃煮にしてみると、味がすこし物足りない。山辺さんをうならせた味が出ないのである。味には無頓着な亭主までが「海のクサギより、山のクサギが味がええ」と言い出した。

梅雨も終わりに近い頃、足摺半島を一周した。岬の先端近くの民宿の側で、今まで見てきたクサギとはどこか違うクサギを車の窓越しに一株見つけた。葉は大きくて厚みがあり、葉脈や毛の生え方も違う。臭いはあまり強くない。肝心の花はまだ咲いていない。八月の中ごろ、気になるクサギを見に行く。今度は花が咲いていた。雄しべ、雌しべがクサギに比べて短く、約半長。その後、これはショウロウクサギであるということが分った。山中目録にあった本種がずっと気になりながら、採集できずにいた。今やっとその存在に気づいた。半島をぐるりと回ってみると、松尾から赤ばえ付近にかけては普通に生えていた。そしてクサギとはいえば、ショウロウクサギがはえているあたりにはほとんど見られないことにも気づいた。昨年、大月町の海を見下ろす道端で採った、味があまりよくなかったクサギも、同じものであることが分った。

足摺でくさぎなを良く食べる、と言う人に話を聞いた。このあたりでは、葉を茹でて水に晒し、焼き魚の身などと一緒に醤油であえて食べる。佃煮はしない。くさぎなといえばこの一種で、他にクサギがあることは知らない、ということであった。植栽したものではなく、空き地などに昔から自生している、とも話してくれた。

海の味と山の味の違いは、ショウロウクサギとクサギの違いだったのだ。これらの二種は、海と山にすみわけているのかどうか。このことにも目を向けてみたいと思っている。そして、足摺でくさぎなの食べかたを教えてくれた、まだ山の味を知らない山田さんと、山の味を絶賛した味にうるさい山辺さんに二種のくさぎなを送って、味比べをしてみたいと思っている。どちらに軍配が上がるか、楽しみだ。

*****編集担当者から*****



四国の樹木観察図鑑（高知新聞社発行）によれば、「早春の若葉を摘み取ってよく茹で、水に晒して臭気を取り、刻んで佃煮にすると独特の風味がある。精進料理によく用いられる」とあります。

また、土佐・味の百科（高知新聞発行）には、「クサギナの油いため」が、土佐の味ふるさとの台所（高知県食生活改善協会編・発行）には、「くさぎ菜めし」「クサギ菜の油炒め」「くさぎ菜の白え」が紹介されています。

今年の春には皆さん挑戦してみてください。

写真：クサギの葉（岡山理科大学総合情報学部生物地球システム学科 植物生態研究室（波田研）のホームページから。）

わたしのフィールドノートその10 神います島に渡る

田城 光子

黒潮町佐賀はカツオの町として知られ、港には大きな加工場やタタキ作りの体験できる施設があり、大小たくさんの漁船が賑やかに出入りしている。中央に広い真っ直ぐな道が沖に向かって延びており、旧佐賀町のシンボルであるオガタマノキが植栽されている。この道路の先端に立つと、すぐ目の前に小さな島が浮かんでいるのが見える。鹿島である。島の頂には、海上交通の神様「武甕槌命 タケミカヅチノミコト」を祀る鹿島神社がある。全島、常緑広葉樹に覆われた、魅力的な景観の島だ。昭和31年までは女人禁制であったが、現在は上陸が許されている。しかし陸続きでは無いから、簡単に行くことはできない。やっと島に渡る機会をいただき、12月16日、初めて鹿島の自然を観察することができた。

この日は快晴。風もなく、海はよく凪いでいた。12月とは思えないような、暖かい日曜日の午前10時。佐賀漁港より船に乗り、島の北側に上陸。西側をぐるりと回って、岩場の上の鳥居をくぐる。鳥居の側には、植栽されたものと思われるが、サクラの木が一本あった。岩上にはアゼトウナが満開。コバナツツナミも一輪咲いている。急な石段を、島を南にまきながら登ると、頂上に鹿島神社の小さな建物があつた。周囲はイスノキ、イヌマキ、モッコク、スタジイ、ハマセンダン、ホルトノキなどの巨木が生い茂っていて、昼間なのに薄暗い。樹高20メートル、胸高周囲3メートルはあると思われるような木がいっぱいある。その間に、ヤブツバキ、タイミンタチバナ、ミミズバイ、クチナシなどが多く見られる。林床にはツルコウジやアリドオシなどの低木と数種のシダ(シダはわたしは細かく分類できない)、スゲの仲間やユリ科の一種と考えられる草本類が群生しているが、この時期花も果実もなく、正確な名前を知ることができない。そして島のほぼ中央には、町の木であるオガタマノキが威風堂々、天を見上げて立っていた。

参道南側斜面で、大きなつる植物を見た。幹まわりはゆうに20センチは越えていると思える。他の巨木に絡まりながら、大蛇のように樹冠にむかって這い上がっている。つるの途中に「ツルグミ」と名札が付けられていた。ツルグミがこのように何十メートルもの巨木になるのか、濃い茶色の規則的な模様の樹皮を形成するのか、わたしにはよくわからない。枝や葉を確認しようと思ったがはるか上で、見

ることが出来なかった。

日当たりのよい林縁では、大きく育ったキジョランが、アサギマダラの幼虫に食べられたあとの丸い穴を残した葉と、鬼女の白髪のような種子をちらつかせた果実をぶら下げている。春はミカドアゲハが、秋にはアサギマダラが飛び交うであろう島を想像した。今は、漁船のまわりに群れる海鳥ばかりが目立って、他の生き物の気配が感じられない。鹿の島と書かれてはいるが、鹿がいるとは思えないし、猪もいそうにない。夏には藪蚊が大変多いとは聞いたが。

石段には無数のシイの実が落ちていた。細長くて先が尖っている、樹皮には縦にはしる割れ目があることなどから、スタジイと同定したが、シイの同定は難しくいつも正解を出せない。神聖な鹿島のシイの実でご利益をいただけるかもしれないと思い、手のひらひとつ分だけ、載せて帰った。はたして鹿島の神様は、わたしに力をお授けくださるかどうか。「わしは海の交通安全が専門じゃ。学問のことは菅原さんに相談してくれ」とおっしゃるだろうか？これだけの森に棲んでいらっしやるのだもの、なんだったかなえてくれそうな気がする。

身の引き締まるような2時間は、あっという間に過ぎた。この島に自生するというキノクニスゲ、ウラシマソウなどはこの時期花は無い。もう一度、花の時期に渡りたいと思う。真っ赤に熟していたサトイモ科の果実は、竿の先に釣り糸をたれたウラシマソウだったら嬉しい。鹿島は、昭和55年8月15日、高知県自然環境保全地域に指定されている。

野山での拾いもの まあるいしいのみ

坂本 彰

シイの実の季節である。今年は特に豊作で、あちこちで拾うことができた。

安芸市の山奥で育った私にとって、この季節のシイの実は、格好のおやつであった。その記憶とともに、「ぼくらは しいのみ まあるい しいのみ・・・」という歌も懐かしい。メロディーは覚えているのだが、歌詞が完全には思い出せない。「お池に落ちて遊ぼうよ・・・ 小窓に落ちてたたこうよたたこうよ」だったか・・・？ インターネットで検索を重ねて、やっと正しい歌詞に行き着いた。

「しいのみ学園」の歌

作詞 西 葉子

作曲 齋藤一郎

ぼくらは しいのみ まあるい しいのみ
お池に 落ちて 泳ごうよ
お手に 落ちて 逃げようよ
お窓に 落ちて たたこうよ たたこうよ

ぼくらは しいのみ 小さな しいのみ
小鳥に 落ちて 飛びたいな
お舟に 落ちて 乗りたいな
こぶたに 落ちて 跳ねたいな 跳ねたいな

みんなは しいのみ 元気な しいのみ
お風に 揺れて 歌おうよ
お庭で ころころ 遊ぼうよ
みんな 仲良く 遊ぼうよ 遊ぼうよ



ツブラジイ（コジイ）堅果と殻斗 高知城公園で採集

少し記憶違いもあり、一番の歌詞と三番の歌詞を混同していた。お池に落ちて「遊ぶ」のではなく「泳ぐ」のであり、「遊ぼうよ」は1番でなくて3番の歌詞であった。そして、たたくのは「小窓」でなくて「お窓」であった。小学校で習ったのか、ラジオから流れてくるのを聞き覚えたのか定かでないが、どちらにしても50年近い昔の話になってしまった。おそらく、この機関誌の読者でも、しいのみ学園の歌を歌えるのは、多分少数派であろう。

最初から話が脇道にそれてしまったが、今回書きたかったのは、シイの実学園の歌のことでなくて、「まあるいしいのみ」のことである。先日高知県植物誌の調査チームで、旧夜須町と芸西村との境界に沿った尾根を調査した。その際、「丸いシイの実」と「細長いシイの実」の両方を標本用に採集し、ついでにおやつ用にたくさん拾った。私が属している植物誌調査チームのメンバーは、私と同世代の人たちを中心に、もう少し若い年代の人たちが多く、シイの実が落ちてると、標本として採集するよりは「昔の味を楽しみたい」という方々が多い。日ごろの協力に感謝して、木に登って、枝をゆすって実を落とすというサービスを何十年ぶりにしてしまった。かつては、お宮やお寺の境内にあり、子どもたちの冬の生活と密接に結びついていたと思うが、いまどきシイの実を拾うのは、大人、しかも結構齢のいった

大人である。

その時に、子どもの時拾ったのは「丸かった」か「細長かった」ということが話題になった。わたしは、皆さん丸いシイの実を拾ったとも思っていたが、以外にも「細長い実」が多く、「丸い実」は少数派であった。



スダジイ 堅果と殻斗 (牧野植物園標本)

シイのうち、細長い実をつけるのは「スダジイ」で、丸い実をつけるのは「ツブラジイ (コジイ)」とされている。歌詞にあるような、丸くて小さい実をつけるツブラジイ (コジイ) はスダジイよりも分泌域が狭く、伊豆半島から九州までの、瀬戸内を含む太平洋側にしか存在しないが (日本の森林植生 山中二男著)、しいのみ学園の作詞者の西葉子さんは、ツブラジイの分布域に

生活されていたのだろうか？

スダジイとツブラジイを葉の大きさや厚

さ、樹皮で見分ける人もいるが、二つを並べた場合は別にして、素人ではなかなか難しい。一番確実なのは、果実を見て「細長いのがスダジイ」「小さくて丸いのがツブラジイ」と判断するのだが、それでも、中間的な形のものもあり、判断に迷うこともある。二つをそれぞれ別の種あるいは亜種として取り扱う説がある一方で、独立行政法人森林総合研究所材木育種センター遺伝資源部のホームページ (<http://ftbc.job.affrc.go.jp/html/topics/iden/siinoki.htm>) によれば、同部が全国 200 地点で収集した約 450 個体のシイの実の大きさを、小さい個体から大きな個体へと順番に並べると連続的に変化しており、どこが境目なのかわからないといったことが指摘されている。

分類学の話はともかく、高度成長期以前に、幼年時代を過ごした私たちの世代にとっては、シイの実は懐かしい食べ物である。(露店で販売していたのは、スダジイよりも一回り太いオキナワジイではないかと思うが、定かでない。)

夜須町で拾ったもの (右の写真) は、十分乾燥させた後、フライパンで煎って私の胃袋におさめた。



観察会のお知らせ

スミシと早春の花観察会

観察会場の鏡ダム河畔の雑木林では、シハイスミシ、タチツボスミシ、コスミシなどスミシの仲間の他アマナ、シロボウエンゴサクなどの早春の花を見ることができます。

2008年3月22日(土曜日) 午後1時30分から

場所 高知市鏡鏡ダム周辺

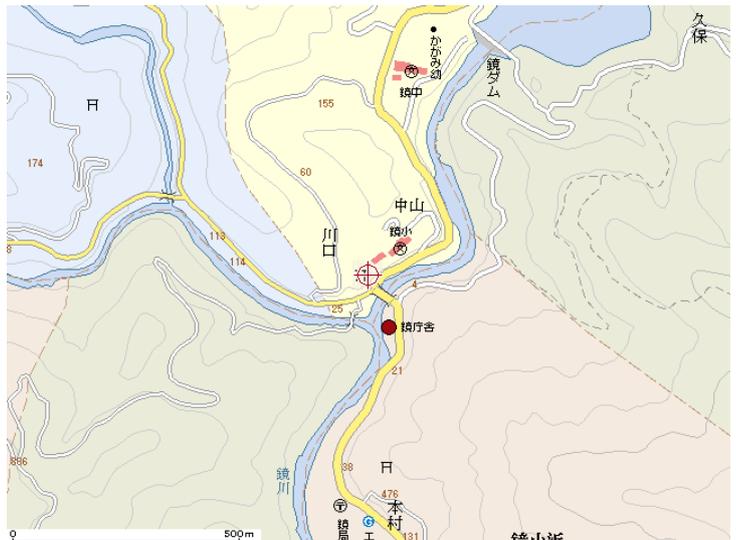
午後1時30分に高知市鏡(旧鏡村)川口橋北詰にお集りください

バス利用の方は、北部交通バス堺町発12時46分 畑川行き川口下車が便利です。

講師 細川公子さん

持参するもの 筆記用具 あれば図鑑

その他 雨天中止



会費納入のお願い

会費(年額 1,000円)を未納の方は納入をお願いいたします。

納入方法は郵便振替が安価で便利です。郵便局備え付けの振替用紙を利用して、振込みをお願いします。

郵便振替の振込口座番号は **01630-9-41422**

加入者名は **高知県自然観察指導員連絡会** です。

「ネイチャー高知」の原稿を募集します。「ネイチャー高知」は、高知県自然観察指導員連絡会の機関紙として、1月、7月の年2回発行しています。自然保護に関する主張やエッセイ、フィールドの紹介など何でも結構ですので、どしどし投稿ください。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

NO 30

事務局 780-8075 高知市朝倉南町 3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail akira@baobab.or.jp